

ひとつの言葉

【言葉は心の表れ】

「人は何かと言いたがる。口を開けば愚痴や文句、口を開けばすぐケンカ、口を開けばやかましい。同じ三つの口開くなら：口を開いて人をほめて、口を開いて優しい言葉、口を開いてありがとう。品には口が三つある。同じ三つの口を開いて、あったかい心を持って、品のある人になりたい」

「光陰矢の如し」とはよく言ったもので、年々実感として分かる様になってきました。皆様にとつて平成二十六年は、どの様な一年間だったのでしょうか？

さて、冒頭の三つの口は、ある新聞の投書欄にあった文々です。なるほどそうですね。「上品」や「下品」を上手に言い表していますよね。私達の心は目に見えないものですが、人の口から出る言葉は、その目に見えない、その人自身の品格や品性がそのまま外に現れ出てくるものと言えらるでしょう。古来日本人は「言霊（ことだま）」と言いました。つまり、その人が発する言葉の質が、そっくり

そのままその人の人格を投影しているという事になってきます。そこで今一度、冒頭言葉をご覧になって頂きたいと思えます。まず初めに、「下品」に関する三つの言葉には共通点があります。何だと思えますか？「愚痴・文句・ケンカ・やかましい」これらは全部、自分位の考え方から出てきた言葉という事になるでしょう。また一方「上品」に関する三つの言葉にも共通点があります。「人をほめて・優しい言葉・ありがとう」と、これらは全部、相手に対する感謝、思い遣りの言葉という事になります。

私達の人生というのは、山あり谷あり、大海原という荒波の中を、人と人とが寄り添い合い、支え合いながら航海している様なものです。そして人と人を繋ぐ最も大切なものの一つが、その人自身を形成している心そのものである。「言葉」という事になります。「言葉」をなぜ重視しなければいけないのかと言えば、私達は誰一人として、自分一人で生きていけるといふ人はいないからです。また、「言葉」一つで人を生かすもすれば、殺すこともできてしまうからです。人は落ち込み、苦しんだ時、誰かの一言で立ち直る事があ

ります。また自暴自棄になり、他人の事を考えずに好き勝手に行動している時、誰かの一言で自分の愚かさに気付くことがあります。

人の心に勇気と自信を与える名言中の名言と言えば、日本海軍・山本五十六連合艦隊司令長官の言葉です。

《やってみせ、言つて聞かせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ》

《話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず》

《やっている、姿を感謝で見守つて、信頼せねば、人は実らず》

いずれも山本五十六の名言ですが、家庭では親、組織では上司、人の上立つ立場に置かれた人が、肝に銘じなければならぬ不変の真理といえますよう。

【縁を生かす】

作者は不詳なのですが、『ひとつの言葉』という素晴らしい詩を紹介しています。

ひとつの言葉でけんかして・ひとつの言葉で仲直り・ひとつの言葉で涙を流し、ひとつの言葉で笑い合い・ひとつの言葉で頭が下がり・ひとつの言葉でいがみ合い・ひとつの言葉はそれぞれに・ひとつの心を持っている・きれいな言葉はきれいな心・優しい言葉はやさ

しい心・ひとつの言葉を大切に・ひとつの言葉を美しく

私達は言葉という素晴らしい、そして優れた文化をもっています。心の中は目には見えませんが、言葉によって目には見えない心の中を表現できます。

何気なく発した言葉でも誰かのことを傷つける場合がありますね。反面、誰かに温かく声をかけてもらったり、柔らかみのある言葉を聞いたりと、柔らかい心になります。言葉には力があります。心があります。人と寄り添い歩む人生ならばこそ、常に言葉の使い方には気をつけたいものですね。

最後に、その著書『心に響く小さな五つの物語』致知出版社から、シスターであり、文学博士でもある、鈴木秀子先生の感動実話をご紹介します。今年の締め括りとさせて頂きます。

鈴木先生が五年生の担任になった時、一人、服装が不潔でだらしない、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録には少年の悪い所ばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生からの記録が目にとまった。

「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強もよくでき、将来が楽しみ」とある。

間違いだ。他の子の記録に違いがない。先生はそう思った。

二年生になると「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。

三年生では「母親の病気が悪くなり、疲れていて、教室で居眠りする」三年生の後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、

四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力をふるう…」

先生の胸に激しい痛みが走った。ダメと決めつけていた子が、突然、深い悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。先生にとって目を開かれた瞬間だった。放課後、先生は少年に声をかけた。

「先生は夕方まで教室で仕事をやるから、あなたも勉強していかない？わからないところは教えてあげるから」
少年は初めて笑顔を見せた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で少年が初めて手をあげた時、先生に大きな喜びがわき起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスは午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押しつけてきた。あとで開けてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていたものに違いない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、

気がつくとも飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なお母さんだ」
六年生では先生は少年の担任ではなくなつた。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。

「先生は僕のお母さんのようです。そして、今まで出会った中で一番素晴らしい先生でした」
それから六年。またカードが届いた。

「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学する事ができます」
十年を経て、またカードがきた。そこには先生と出会えた事への感謝と、

父親に叩かれた体験があるから、患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締め括られていた。

「僕はよく五年生の先生を思い出します。あのまま、ダメになってしまう僕を救ってくださった先生を、神様のように感じます。大人になり、医者になった僕にとって最高の先生は、五年生の時に担任してくださった先生です」

そして一年。届いたカードは、結婚式の招待状だった。
「母の席に座ってください」と一行、書き添えられていた。

たった一年間の担任の先生との縁。その縁に少年は無限の光りを見出し、それを拠り所として、それからの人生を生きた。ここにこの少年の素晴らしさがあります。

人は誰でも無数の縁の中に生きていく。無数の縁に生まれ、人はその人生を開花させていく。大事なものは、与えられた縁をどう生かすかでありましょう。

心揺さぶる素晴らしい言葉を一つでも多く携えて、来る新しい年も心安く迎えましょう。

合掌 副任職 谷川寛敬



本堂屋根（銅板）改修工事も

お蔭様で無事完成致しました。

ご寄進賜りました皆様には、厚く御礼申し上げます。

毎朝のお勤め時にご寄進頂いた方々の家内安全、身体健康を御祈願致しております。

尚、未だご協力頂いていない方には、何卒宜しくご協力をお願い申し上げます。

又、勸募期間は、明年三月末迄となっております

- ・ 二十二万円……一人
- ・ 十万円……一人（五回目）
- ・ 五万円……一人
- ・ 三万円……一人
- ・ 二万円……二人
- ・ 五千元……一人（二回目）

《※ 十一月末現在の寄付合計

11, 383, 500円

※ 勸募目標 2, 500万円

（約1, 260万円不足）